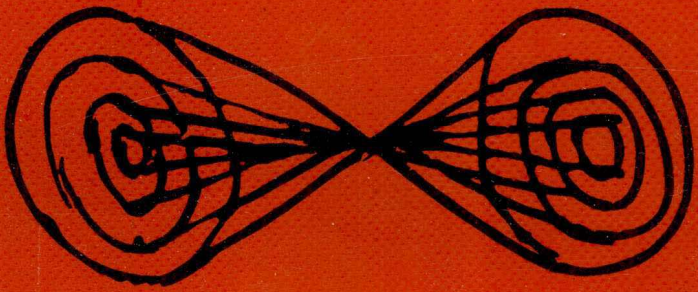

ドストエフスキー ★★

カラマーゾフ兄弟 I

世界文學大系

36 I

筑摩書房版

世界文学大系 36A

ドストエフスキー ★★

昭和35年6月5日発行

定価450円

訳者　小沼文彦

発行者　古田晁

印刷者　山元正宜

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768　電話 (291) 局7651

目次

カラマーゾフ兄弟

小沼文彦訳

著者の言葉 5
第一篇　ある小家庭の歴史 7
第二篇　場ちがいな寄合い 30
第三篇　淫蕩な人びと 85
第四篇　感情の激発 149
第五篇　プロとコントラ 197
第六篇　ロシヤの修道僧 263
第七篇　アリョーシャ 303
第八篇　ミーチャ 337
カラマーゾフ兄弟、ヨーロッパの没落　ヘルマン・ヘッセ　手塚富雄訳 412

裝

幀

庫

田

發

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ドストエフスキー　★★

カラマーゾフ兄弟

アンナ・グリゴーリエヴナ・
ドストエフスカヤにささぐ

誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦地に落ちて死なずば、ただ一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。
（ヨハネ伝第一二章二四節）

著者の言葉

わが主人公アレクセイ・フョードロヴィッチ・カラマーゾフの一代記に取りかかるにあたり、私は多少のためらいを感じている。それはほかでもない、私はアレクセイ・フョードロヴィッチをわが主人公と呼んではいるものの、彼がけっして偉大な人物でないことを、自分でもよく心得ているからである。したがって『彼をその主人公に選んだのは、あなたのアレクセイ・フョードロヴィッチになにかすぐれた点があってのことなのか？　いったい彼がどんなことを成しとげたというのだ？　誰に、そしてなんで知られている男なのか？　どういう理由で読者である自分は、そんな男の一生の出来事の研究にひまをつぶさなければならないのか？』といったような質問をかならず受けるにきまっていることが、今から私にはよくわかっている。

中でももっとも致命的なのはこの最後の質問である。それに対してはただ『たぶん、ご自分でこの小説をお読みになったらおわかりになるでしょうよ』としか答えられないからである。だがこの小説を読み終ってもなおそれがわからない、わがアレクセイ・フョードロヴィッチに注目すべき点があるなどとはどうにも同意いたしかねる、と言われたらどうしよう？　こんなことを言うのも、悲しいことだが、今からそれが見えすいているからなのである。私にとっては彼は注目すべき人物なのであるが、はたしてそれをうまく読者に立証できるかどうか、まったくもって疑わしいしだいだ。問題は、彼が活動家は活動家であっても、これという型にはまらない、つかみどころのない活動家だという点にある。もっとも、現代のようなこんな時代に人間に明瞭さを求めるほうが、むしろおかしなことかもしれない。ただひとつ、どうやらかなり確実だと思えるのは、彼が一風変った、畸人とも言いうる人物だということである。しかしながら風変りであるとか、奇行癖とかいうものは、それによって注目の権利をあたえられることよりも、むしろ傷つけられる場合のほうが多いものだ。ことに現代のようにすべての人が、個々のものをひとつにまとめ、全般的な乱雑さの中に、せめてなんなりともひとつの普遍的意義を発見しようと努めている時代にあってはなおさらのことである。だいたい畸人というものは多くの場合、特殊で、全体から孤立したものなのである。そうではないだろうか？

さてそこで諸君がこの最後のテーゼに不同意で『それは違う』とか『かならずしもそうとは限らない』と答えられるとすれば、おそらく私はわが主人公アレクセイ・フョードロヴィッチの意義について、大いに意を強くするに相違ない。というのは、畸人は『かならずしも』特殊で全体から孤立したものであるとは限らないばかりか、むしろ反対に、どうかすると彼こそその内部に全体の中心を包蔵しているのではないか、そして残りの同時代人は――ひとり残らず、なにかの風の吹き廻しで、なぜかは知らないが一時彼からもぎ離されているのではあるまいかと思われる場合が、よくあるからである……。

ところで、私はなにもこんな、まったく面白くもなんともない、じつに漠然とした説明などはじめずに、前置き抜きでいきなりずばりと筆をおろしてもよかったのである。お気にめしたら――そのまま終りまで読んでくださるに違いないからだ。しかし困ったことに、伝記はひとつだが、小説のほうはふたつになっている。しかも主体となる小説は二番目のもので――これ

は、わが主人公のすでに現代になってからの、ほかならぬ現に動きつつある今日ただいまの行動である。第一の小説はすでに十三年も前の出来事であり、小説と呼ぶのもおこがましいしろものであって、単にわが主人公の青年時代初期における一瞬間にすぎない。だが、どうしてもこの第一の小説をオミットするわけにはいかないのだ。第二の小説の中のいろいろなことがわからなくなる恐れがあるからである。しかしながらそうなると私の困惑はいっそう錯雑したものになってくる。もしもすでに私が、伝記作者自身からして、こんなあまりパッとしない、つかみどころのない主人公のためには、ひとつの小説だけでも余分なくらいかもしれないと考えているとしたら、それをふたつにしようものならいったいどんなことになるだろう、それに私のこうした不遜さは、いったいなんと説明したらよいものだろうか？

こうした問題の解決に困惑しきった私は、結局ぜんぜん解決をつけずにそのままにしておくことに決心した。もちろん、炯眼な読者は私が最初からそんな気持に傾いていたことを、もうとっくに見抜いてしまって、なんだって役にも立たない言葉を並べたて、貴重な時間をつぶすのかと、私に対してただ腹を立てておられたに相違ない。これに対しては今度はもうはっきりとお答えしておこう。私が役にも立たない言葉を並べたて、貴重な時間をつぶしたのは、第一には、礼譲の念からであり、第二には、『とにかくなんかかんか予防線だけは張っておいたのだ』と逃げをうつずるい考えからなのである。そうは言うものの、私はこの小説が『本質的には完全にひとつのものでありながら』自然にふたつの物語に分かれてしまったことを、むしろ喜んでいるくらいである。第一の物語にお目を通したならば、読者は今度はもうご自分で、はたして第二の物語を手にとる価値があるかないかを決めてくださるに違いない。もちろん、誰にもせよ、またいかなる点においてもけっして束縛を受けているわけではないから、第一の物語の最初の二ページあたりで、もう二度と開けてみないつもりで本を投げ出してしまっても、それはいっこう差支えのないことである。しかしながら、公平な判断を誤るまいとして、ぜひとも最後まで読み通そうとする、やさしい心をもった読者だっているのだ。たとえば、ロシヤのすべての批評家がそれである。ところでこうした人びとに対してはなんといっても気が楽である。彼らはじつに几帳面で良心的ではあるが、ともかくもこの小説の最初のエピソードあたりで気楽にこの物語を投げ出せるように、もっとも正当な口実をあたえておくことにする。さて、前置きはこれでおしまいである。そんなものは無用の長物だということに、私はまったく同感であるが、もう書いてしまったことでもあるので、これはそのまま残しておくことにする。

それではいよいよ本文に取りかかることにしよう。

第一部

第一篇　ある小家庭の歴史

一　フョードル・パーヴロヴィッチ・カラマーゾフ

アレクセイ・フョードロヴィッチ・カラマーゾフは、今からちょうど十三年前に起った悲劇的な奇怪な死によって、一時はなかなか（いや、今でもまだときどき噂のでる）評判の高かったわれわれの郡の地主、フョードル・パーヴロヴィッチ・カラマーゾフの三男であった。だがこの事件のことはいずれ適当な場所でお話しすることにする。そこでここではただこの『地主』について（彼は一生のあいだ自分の領地で暮らしたことはほとんどまったくなかったと言ってもいいくらいだが、われわれのところでは彼のことをそう呼んでいたのである）彼は風変りなタイプの、しかしかなりちょくちょく見受けられるタイプの男だったとだけ言っておこう。ほかでもない、やくざで放埒なばかりでなく、それと同時にとりとめのない――しかし、同じとりとめがないといっても、自分の財産に関する細かな事務はみごとにやってのける、だがそれがどうやら唯一の才能らしく思われるタイプの男だったのである。たとえば、フョードル・パーヴロヴィッチはほとんど裸一貫で世の中に乗りだし、地主としてはきわめてささやかなものだったし、よその家の食事をねらって走り廻ったり、うまく居候に転がりこむことばかり考えていたが、そのくせいざ死んでみると、現金で十万ルーブリから残していたことがわかった。それにもかかわらず彼は一生を通じて、われわれの郡きってのもっともとりとめのない、狂気じみた人間の一人として押し通してしまったのである。くり返して言うが、これは愚かさなどというものではない。こうした狂気じみた人間の多くは――かなり利口で、狡猾なものである。つまりこれは、とりとめがないので、しかもなにか一風変った、わが国独特のあのとりとめのなさなのである。

彼は二度結婚して、三人の息子をもった。長男のドミトリイ・フョードロヴィッチは先妻、あとのふたり、イワンとアレクセイは後妻の子だった。フョードル・パーヴロヴィッチの最初の妻は、やはりわれわれの郡の地主である、かなり富裕で名門の貴族ミウーソフ家の出であった。持参金つきの、おまけに器量よしで、しかも今でこそわが国でも珍しくはなくなったが、前世紀においてもやっとちらほら姿を見せはじめたばかりの、てきぱきとした聡明な女性のひとりであるこの少女が、どうしてこんな取るにも足らない『ろくでなし』――当時はみんなが彼をそう呼んでいた――のところに嫁にゆく気になどなったものか、それはこれ以上説明しないことにする。なにしろ私は、これはまだ前世紀の『ロマンチック』な時代のことではあるが、何年ものあいだひとりの男に謎のような思慕の情をよせていたが、きわめて平穏無事にいつでも彼のところへ嫁にゆけたのにもかかわらず、結局、どうにもならないような障碍を自分で勝手に考えだしたあげくのはて、ある嵐の晩に、断崖のように切り立った高い岸から、かなり深い急流に身をおどらして、ただただシェークスピアのオフェリヤにあやかりたいばかりに、つまりまったくの気紛れ心から身をほろぼしたひとりの少女を知っているからである。彼女がずっと前から目星をつけて惚れこんでいたその断崖が、それほど絵のように美しいものでなく、その代りに、ただの散文的な平べったい岸であったなら、こんな自殺騒ぎなどはあるいはぜんぜん起こらなかったかもしれないと言えるくらいだ。これは正真正銘の実話であるが、しかし最近の二、三世代のあいだにこのような、あるいはこれに類した事実が、わがロシヤの生活においてすくなからず起ったものと考えなければなるまい。これと同様に、アデライーダ・イワーノヴナ・ミウーソヴァの行動も、疑いもなく、他人の思想の反映であり、またとらわれた心の爆発だったのである。彼女は、あるいは、女性

の自主性を宣言し、社会一般の約束に反抗し、その一門の人たちや家族の者の圧制に抵抗したくなったのかもしれない。そしておせっかいな夢見る心のおかげでフョードル・パーヴロヴィッチこそ、身は居候であるにしても、一路向上の機運に向かいつつあるこの過渡期における、ともかくももっとも果敢でもっとも皮肉な人間のひとりであると、ほんの一瞬間にもせよ、彼女は信じこんでしまったに違いない。だが実際は彼は単なる腹黒い道化以外の何者でもなかったのである。さらに薬味がきいて痛快なのは、道行きという手段をとったことで、これがアデライーダ・イワーノヴナをすっかり魅了してしまったのだ。一方フョードル・パーヴロヴィッチは、その当時その社会的地位からいっても、こうした抜打ち行為ならなんでも、待ってましたとばかりとびつきたいところだった。なにしろ手段などにはおかまいなく、とにかく自分の出世の道をひらきたくてうずうずしていた際だったからである。羽振りのよい名門と縁を結んで持参金をせしめるなどということは、まことによだれのたれるような話だった。相互の愛情にいたっては——花嫁のほうにも、また彼のほうにも、アデライーダ・イワーノヴナの美貌をもってしてもなお、どうやらぜんぜんなかったようである。こんなわけで、相手がちょっと色目を使いさえすれば、待ってましたとたちまちどんな腰巻にでもべたべたとまとわりつく、淫蕩無比な男で一生を押し通したフョードル・パーヴロヴィッチにとっては、こんなことはおそらく一生を通じて唯一の例外だったといえるかもしれない。余談ながらこの女性こそは、彼の心に情欲的な格別な感銘を少しもあたえなかった、唯一の女性だったのである。

アデライーダ・イワーノヴナは、駆落ちをするが早いか、自分はその夫を軽蔑しているだけで、ほかの感情はなにひとつもっていないことを、たちまち見てとってしまった。こういうわけで、結婚の結果は非常な速さで明るみに出されていった。実家のほうではむしろかなり早目にこの出来事に見切りをつけて、家出娘に持参金まで分けてやったにもかかわらず、夫婦のあいだにはこの上なしの乱脈な生活と、絶え間のないいざこざがはじまった。人の話ではその際にも新妻のほうがフョードル・パーヴロヴィッチよりも、比較にならぬほど上品な、立派な態度を示したということである。今では誰でも知っていることだが、彼女が金を受け取るが早いか、二万五千ルーブリにも及ぶその金をぜんぶ、彼はたちまちちょろまかしてしまったのである。つまりこの何万という大金が彼女にとってはその時以来、不意にまったく跡形のないものになってしまったわけである。同様に彼女の持参金の中に含まれていた小さな村と、町にあるかなり立派な家屋を、彼は長いあいだ、全力をつくしてなにかそれ相当の証書を行使して、自分の名儀に書きかえてしまおうと努力した。そして絶え間なしの恥知らずな強要や哀願によって妻の心中によびおこされた彼に対する、いわゆる軽蔑と嫌悪の念だけによっても、また、ただ自分から手をひいてくれさえすればいいという彼女の精神的疲労につけこむことによっても、おそらく彼はまんまとその目的を達してしまったに相違ない。ところが幸いなことに、アデライーダ・イワーノヴナの実家がくちばしを入れて、この横領を阻止してしまった。夫婦のあいだにしょっちゅうつかみ合いの喧嘩があったことも確かにわかっているが、しかし言い伝えによれば、なぐったのはフョードル・パーヴロヴィッチではなく、気性の激しい、勇気があって、浅黒い顔をした、気短かですばらしい体力に恵まれていたアデライーダ・イワーノヴナのほうだったということである。で、結局彼女は家を棄てて、三つになるミーチャ（ドミトリイの愛称）をフョードル・パーヴロヴィッチの手もとに残して、貧苦に身を亡ぼしかけていたある神学生の教師と手に手をとって、フョードル・パーヴロヴィッチのもとから逃げ出してしまった。フョードル・パーヴロヴィッチはたちまちその家をハレム同然にしてしまい、放埒きわまりない飲酒生活にふけりはじめた。そして、その合間合間にほとんど全県下を巡り歩いて、会う人ごとに誰彼かまわず、自分を棄てて逃げたアデライーダ・イワーノヴナのことを涙ながらに訴え、おまけに夫として口にするのも恥かしいくらいの、その夫婦生活の詳細を述べたてたものである。肝心なのは、裏切られた夫という滑稽な役をみんな

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

の前で演じて見せ、さまざまな粉飾まで加えて自分の恥辱の詳細を描写することが、彼にとってはどうやら愉快な、いやむしろ心をくすぐるような楽しみであったらしいという点である。『いやどうして、フョードル・パーヴロヴィッチさん、あなたは立派な位を授かったんですもの、辛いことは辛いでしょうが、さぞご満足なことでしょうよ』などとからかって言う者もいた。いやあの男は道化者の仮面をあらたにして人前に出られるのが嬉しいのだ、しかもそれをいっそうおかしく見せるために、わざと自分の滑稽な立場に気がつかないような振りをしているのだ、とつけ加える者さえ多かった。だがひょっとすると、彼にとってはそんなことは、きわめて天真爛漫なことだったのかもしれないのだ。やっとのことで彼は、出奔した妻の行方を突きとめることに成功した。哀れな彼女は例の神学生と一緒に流れ流れてペテルブルクにたどりつき、そこで奔放きわまる解放に惑溺していたのである。フョードル・パーヴロヴィッチは早速騒ぎ立てて、ペテルブルクに出かける準備に取りかかった。『だがいったいなんのために？』――それは彼にももちろんわからなかった。確かに彼はその時、ことによるとそのまま出発したかもしれなかったのだ。ところがいざ出発と決心を固めると、彼はまず出発の前に元気をつけるために、あらためて涯知れぬ酒宴にふける特別な権利があるとすぐに考えた。しかしちょうどその折も折、彼女がペテルブルクで死んだという報知が妻の実家のほうへ届いたのである。彼女はどこかの屋根裏部屋で急死したもののようだった。死因は一説によると――チフスとも言われ、また他の説によると――餓死らしいとも言われている。フョードル・パーヴロヴィッチは酔っぱらっている最中に妻の死を知ったが、人の話では、いきなり往来へ駈けだして、喜びのあまり両手を天にさしのべて『今こそ自由の身となりぬ』と叫びはじめたということである。また一説では――まるで小さな子供のように泣きじゃくったともいわれている。しかもそれが、じつにいやらしい奴には違いないが、見るのも気の毒なくらいだったということだ。それもこれも、つまり自分が解放されたのを喜んだということも、また解放してくれた女を想って涙を流したということも、またそのどちらの気持でもあったということも、おそらく大いに有りうることに相違ない。多くの場合、人間というものは、たとえそれが悪人であっても、われわれが一般に考えているよりも、はるかに天真爛漫で正直なものなのである。いや、そういうわれわれ自身にしても同じことなのだ。

二　見棄てられた長男

このような男がはたしてどんな養育者であり、父親でありえたかは、もちろん、容易に想像できるであろう。父親として彼は、当然やりそうなことを行なったまでのことであった。つまり、アデライーダ・イワーノヴナとのあいだに生まれた自分の子供を、あっさりと完全に見棄ててしまったのである。しかもそれは子供に対する憎悪の念からでもなければ、裏切られた夫の感情とかいうものからでもなく、ただ単にすっかり彼のことを失念してしまったからにほかならなかった。彼がみんなにうるさがられるほど涙を流したり、泣き言を並べたり、一方自分の家のほうはまったく淫蕩の巣のようにしてしまっていたあいだじゅう、三つになるミーチャを手もとに引き取って養っていたのは、この家の忠僕グリゴーリイであった。もしもそのとき彼がこの子供の世話を見てやらなかったら、おそらくこの子供のためにシャツ一枚かえてやる者もいなかったに違いない。おまけにこの子供の母方の縁者のほうも、なんだかはじめのうちこの子供のことを忘れてしまったようなひょんな工合になってしまったのである。彼の祖父、つまりアデライーダ・イワーノヴナの父親である当のミウーソフ氏は、そのころはもうこの世を去り、ミーチャの祖母にあたる、未亡人になった彼の妻は、モスクワに引き移ってそこで非常な大病にかかるし、姉妹といえばみんな嫁にいってしまっていたので、ミーチャはほとんどまる一年ものあいだ下男のグリゴーリイに引き取られて、下男小屋で暮らさなければならない羽目になったのである。もっとも、かりに父親が彼のことを思いだしたにしても（彼だっていくらなんでもこの子の存在を知らないとは言い切

れたわけのものではあるまい）やはりまたもとの下男小屋に追いやってしまったことだろう。なんといっても子供は自分の放蕩の邪魔になるからである。ところが偶然にも、亡くなったアデライーダ・イワーノヴナの従兄にあたるピョートル・アレクサンドロヴィッチ・ミウーソフがパリから戻ってきた。これはその後ずっと長いこと外国生活をつづけた人だが、そのころはまだ非常に年が若く、だが同じミウーソフ一家でも一風変った人物で、教育があり、ロシヤ的でない都会人で、しかも一生を通じてヨーロッパ人として押し通したが、晩年には四、五十年代（一八四〇年代）における自由主義者となった男であった。そのはなやかなりし全生涯を通じて、ロシヤにあっても、また外国においても、彼は同時代のもっとも進歩的な多くの自由主義者たちと交遊があり、プルードン（フランスの社会主義者、アナーキスト（一八〇九―一八六五））やバクーニン（ロシヤ・アナーキズムの代表者（一八一四―七六））とも個人的な交渉があった。そしてその漂泊生活も終りに近づいてからのことであるが、あの四十八年（一八四八年）のパリの二月革命の三日間のことを、自分もその市街戦の参加者として革命の渦中にあったと言いかねないほどのほのめかしかたで、よく思いだしては話して聞かせるのをことのほか喜んだものである。それが彼の青春時代のもっとも喜びにみちた思い出のひとつだったのだ。彼は以前の標準でいえば（農奴解放は一八六一年）、千人ばかりの農奴に相当する自分の自由になる財産をもっていた。そのすばらしく立派な彼の領地は、われわれの町を出はずれたすぐとっつきのところにあって、土地の有名な僧院の地所と境を接していた。ピョートル・アレクサンドロヴィッチは、まだほんの若い時分に、この遺産を相続するやいなや、よくは知らないがなにか川の漁業権だか森林の伐木権だかのことで、この僧院を相手どっていつ果てるともしれない訴訟を起こしたことがある。彼は『坊主ども』を相手どって訴訟を起こすのを、自分の公民としての、また知識人としての義務であるとすら考えたのだ。もちろん覚えてもいたし、かつて心にとめたことすらあるアデライーダ・イワーノヴナの話を耳にし、またミーチャという子が残されていることを知ると、フョードル・パーヴロヴィッチに対して青年らしい怒りと軽蔑の念をいだいたにもかかわらず、彼はこの問題に立ち入ることにした。その時はじめて彼はフョードル・パーヴロヴィッチと知合いになったのである。彼はいきなり、子供を引き取って養育したいのだがと申し入れた。彼がその後ながいあいだかにもフョードルらしいと語り草にしていたところによると、彼がフョードル・パーヴロヴィッチに向ってミーチャのことを切りだすと、相手はしばらくのあいだ、いったいどこの子供の話をしているのかさっぱり合点がいかないといったふうで、自分の家のどこかにそんな小さな息子がいたのに、むしろびっくりしたような様子だったということである。かりにピョートル・アレクサンドロヴィッチの話には大袈裟なところがあるにしても、それでもとにかくなにか真実に近いものがあったに相違あるまい。しかしながら事実フョードル・パーヴロヴィッチはその一生を通じて、だしぬけになにか誰ひとり思いももうけないような芝居を打って見せるのが大好きだったのである。しかも肝心なのは、どうかするとぜんぜんその必要もないのに、たとえばこの場合のようにまったく自分の損になる場合にも、それをやってのけるという点なのである。もっともこうした傾向はきわめて多数の人間に生れつきそなわっているもので、フョードル・パーヴロヴィッチに限らず、この上なく聡明な人たちのあいだにすら見られるものなのである。ピョートル・アレクサンドロヴィッチは熱心に事をはこんで（フョードル・パーヴロヴィッチと一緒に）子供の後見人にまでなってやった。母親の亡くなった後にとにかく多少なりとも、小さな領地や、地所家屋が残されていたからである。ミーチャはこうしてこの母の従兄にあたる男のところへ身柄も移されたが、この男には自分の家庭というものがなかった。ところが当人はその領地からあがる金の受取り方法をうまく処理し後顧の憂いをなくするやいなや、早速また今度は長く滞在する目的でパリへ急行してしまったので、この子供も、モスクワの名流婦人のひとりである、この男の遠い親戚の夫人の家に預けられることになった。しかしパリに住みなれると、またわけても彼の心にじつに強烈な印象をあたえて、もはや一生涯忘

れることのできなかったあの二月革命が勃発すると、彼もまたこの子供のことをすっかり失念してしまうことになったのである。そのうちそのモスクワの夫人も世を去り、ミーチャもよそにかたづいていた夫人の娘のひとりの手もとに移された。どうやら彼はその後もう一度、四度目の宿替えをしたようである。だが今はそのことについてあまりくどくど述べたてるのはやめにしておく。そうでなくともこのフョードル・パーヴロヴィッチの長男のことは、まだいろいろと物語らなくてはならなくなるのであるから、今はただその説明を抜きにしてはこの小説を書きはじめるわけにはいかない、必要欠くべからざる彼の消息をしるすだけにとどめておく。

まず第一に、このドミトリイ・フョードロヴィッチは、フョードル・パーヴロヴィッチの三人の息子のうちで、自分にはとにかく多少の財産があるから、成年に達したら独立できるという確信をいだきながら成長した、唯一の息子だったということである。その少年期青年期はだらしなく過ぎ去った。高等学校も中途退学し、それからある陸軍の学校に入り、やがてコーカサスへ行って勤務についたが、決闘をして、降等され、ふたたび任官してからも大いにあそんで、比較的多額の金を蕩尽した。フョードル・パーヴロヴィッチから仕送りを受けるようになったのは、もう成年に達してからのことだったが、それまでに彼はいろいろ借財をかさねていた。父親のフョードル・パーヴロヴィッチとはじめて親子の対面をしたのは、すでに成年に達してからで、自分の財産のことで話合いをつけに、わざわざ当地へ出かけてきた時のことであった。どうやらその時も、彼には父親が気に入らなかったようである。彼の滞在は短期間で、父からいくらかの金額を受け取り、これからさき領地からあがる収益の送金方法についてある程度の取決めを結ぶと、早々に出発してしまった。つまり自分の領地の収益額も、またその価格も彼はついにその時はフョードル・パーヴロヴィッチから聞きださずにしまったのである（これは注意すべき事実である）。フョードル・パーヴロヴィッチは最初いちど会っただけで（これも記憶しておく必要がある）ミーチャが自分の財産について、誇大な、誤った見解をいだいているのに、その時すぐに気がついた。だがフョードル・パーヴロヴィッチは特別なもくろみをもっていたので、それに大満足だった。この青年は思慮が浅く、勇み肌で、情欲が強く、短気で、単なる遊蕩児にすぎない、そこでときどきちょっとなにかを握らせさえすれば、もちろんしばらくのあいだではあるが、たちまちおとなしくなってしまうものと、彼は考えたのである。そこでフョードル・パーヴロヴィッチは早速その実行に取りかかった。つまり、ときどきほんの少しの仕送りをしてごまかしていたわけである。ところがとうとう大変な騒ぎがもちあがった。というのは、それから四年後に、堪忍袋を切らしたミーチャが、今度こそはきれいさっぱり父親との話を片づけようと、再度われわれの町にやってきて見ると、思いがけなく、もう財産はぜんぜん残っていないといわれて、彼はそれこそびっくり仰天してしまった。今では勘定にしめくくりをつけるのもむずかしいくらいで、フョードル・パーヴロヴィッチから自分の財産の価格に相当する金額をすでにぜんぶ引きだしてしまい、ひょっとすると、かえって負債が残るかもしれないほどだ、しかもこれこれの時にそちらの希望で取りかわしたしかじかの約束によって、彼にはこれ以上要求する権利もない、等等というわけである。青年は愕然として、嘘ではないか、だまされたのではないかと疑い、ほとんどわれを失って気が狂ったようになってしまった。じつにこの間の経緯こそ、その叙述が私の最初の序説的小説の主題を、というよりはむしろその外郭を形成している、あのカタストロフの導火線となったものである。しかしながらその小説に取りかかる前に、さらにフョードル・パーヴロヴィッチの残りのふたりの息子、つまりミーチャのふたりの弟のことを物語り、彼らがはたしてどこから現われたかということを説明しておかなければならない。

三　再婚と腹違いの子供たち

フョードル・パーヴロヴィッチは四つになるミーチャを追いはらうと、その後すぐに二度目の結婚をした。この二度目の結婚生活は八年ば

かりつづいた。彼がこの二度目の妻を――これもやはり非常に若い女性で、ソフィヤ・イワーノヴナといった――手に入れたのは、彼が怪しげなユダヤ人と連れだって、あるちょっとした請負仕事のために、他県へ出向いた時のことであった。フョードル・パーヴロヴィッチは放蕩もし、酒も飲み、乱行もしたが、自分の資本の運用をおろそかにしたことは一度もなく、そのやり方はもちろん、ほとんど常にいささかえげつないものだったが、いつも巧妙に自分の仕事を処理したものだった。ソフィヤ・イワーノヴナはどこかの素姓の知れない補祭の娘で、小さい時から寄辺のない、いわゆる『みなし児』のひとりだったが、恩人であり養育者であり、同時に迫害者でもあった、ヴォローホフ将軍の未亡人である有名な老夫人の裕福な家庭で成長した。詳しいことは知らないが、おとなしい、気立てがやさしくて内気なこの養い子が、ある時のこと物置の釘に輪索をかけて首をくくりかけたところを、助けおろされたことがあるとかいう話を耳にしたことがある。それほど彼女にとってはこの見かけはそれほど意地悪らしくもないが、ただ無為の生活のためにどうにも我慢がならないほどかたくなになっていた老夫人の、我儘や絶え間のない小言を堪え忍ぶことが辛かったわけである。フョードル・パーヴロヴィッチが結婚を申し込むと、先方ではいろいろ調査した結果、あっさり彼を追いはらってしまった。すると早速彼は、最初の結婚の時と同様に、またしてもこのみなし児に駆落ちをすすめたのである。もしも彼のことをもっと詳しく適当な時期に聞き知っていたならば、彼女はたとえどんなことがあっても彼のところになど行きはしなかったに違いないということは、大いに、大いにありえたことであろう。しかしなにぶんにも他県のことではあるし、それでなくても、恩人の家にいつまでもいるくらいなら、いっそ河にでもとびこんだほうがましだとまで思いつめている十六歳の少女に、いったいなにがわかるだろう。というわけでこの哀れな少女は女の恩人を男の恩人に乗りかえてしまった。フョードル・パーヴロヴィッチは今度は一文も手に入らなかった。将軍夫人がすっかり腹を立ててなにひとつくれなかったばかりか、ふたりを呪って追いだしてしまったからである。だが彼も今度は金をとることを勘定にも入れていなかった。彼はただ汚れを知らない少女のすばらしい美貌に魅せられてしまったのである。しかも肝心なのは、あれほどの好色漢で、それまでは汚れた女の色香だけをおぞましくも好きこのんできた彼が、彼女の汚れを知らない容貌に深く心を動かされたという点である。『あの汚れのない眼を見ると、わしはいきなりまるでかみそりで胸をずばりと斬り裂かれたような気がしたよ』と彼は、例のいかにもいやったらしい忍び笑いをもらしながら後になってからよく話したものである。もっとも、遊蕩児にとってはこれもまた単なる肉欲的な迷いであったのかもしれない。なんらの報酬も得られなかったフョードル・パーヴロヴィッチは、この妻に対して少しも遠慮をしなかった。そして彼女が夫に対していわば『ひけ目』を感じ、彼に『首をくくるところを助けられた』も同然だという立場をいいことにして、さらにまた彼女の異常なおとなしさと内気な性質につけこんで、もっとも月並な夫婦間の礼儀さえも土足にかけて踏みにじってはばからなかった。れっきとした妻のいるその家に、いかがわしい素姓の女どもが集って、よく乱痴気騒ぎが催されたものである。ここで特筆大書すべきことは、前の奥様であるアデライーダ・イワーノヴナを憎んでいた、陰気で、愚直で、理屈っぽい下男のグリゴーリイが、今度は新しい奥様の肩をもって、彼女をかばってほとんど下男にあるまじき態度で、フョードル・パーヴロヴィッチと渡り合ったという事実である。一度などは乱痴気騒ぎを止めさせ、集っていたろくでなしどもを力ずくでひとり残らず追いだしてしまったこともあった。ところがその後、小さい時からずっとびくびくした生活をつづけてきたこの不仕合せな若い婦人に、一種の神経性婦人科疾患ともいうべきものがおこった。これはしもじもの田舎の百姓女などにもっとも多く見受けられるもので、この病気にかかった女は狐つきと呼ばれる。恐ろしいヒステリーの発作を伴うこの病気のために、病人はときとして理性を失うことさえあった。とはいうものの、彼女はフョードル・パーヴロヴィッチとのあいだ

に、イワンとアレクセイのふたりの息子をもうけた。上の子は結婚の当年、下のほうは三年後のことだった。彼女が亡くなった時、子供のアレクセイは四つだった。いささか不思議にも思えるが、しかしその後一生涯、彼が母親の記憶をもっていたことを私は知っている。もっとも、夢のようなかすかな記憶であることはもちろんである。彼女が死ぬと、ふたりの子供は長男のミーチャとほとんどそっくりそのままの境遇におちいることになった。つまりふたりは父親にすっかり忘れられ見棄てられて、またもや同じグリゴーリイの手に移され、前と同様彼の下男小屋に引き取られたのである。ふたりの母の恩人であり養育者であった例の頑固な将軍の老夫人が、ふたりにはじめて会ったのもこの下男小屋でのことだった。彼女はまだ生きていたが、自分の受けた侮辱をこの八年のあいだ夢にも忘れることができなかった。この八年のあいだ彼女は自分の『ソフィヤ』の暮しについて、居ながらにしてこの上なく正確な情報を入手し、彼女が病気になったことや、また彼女のまわりでひどい乱痴気騒ぎが行われていることを耳にすると、一度ならず、二度も三度も口にだして、居候の女たちにこう言ったものである。『これが当然のお報いだよ、あんまり恩知らずだから神様の罰があたったのさ』

ソフィヤ・イワーノヴナが亡くなってからちょうど三カ月目に、将軍夫人はだしぬけにみずからこの町へやってきて、いきなりフョードル・パーヴロヴィッチの家へ乗りこんだ。夫人がこの町にいたのはせいぜい半時間ぐらいのものだったが、やってのけた仕事は大変なものだった。それは夕刻のことだった。この八年間、一度も顔を合わせたことのなかったフョードル・パーヴロヴィッチは、ぐでんぐでんの姿で夫人の前に現われた。なんでも話によると、彼の顔を見るが早いか彼女はなんの前触れもなしに、いきなりばんばんと彼の横面にひどく効き目のある音のいいやつをふたつくらわしておいて、今度は前髪をつかむと上から下に三度ほど小突きまわしたそうである。それからひとことも余計な口をきかずに、まっすぐにふたりの子供のいる下男部屋へと足を向けた。ふたりが湯も使わされず、汚い肌着を着せられているのをひと目で見てとると、彼女は当のグリゴーリイにもいきなりぱんとひとつ平手打ちをくらわせて、子供はふたりとも自分の家に引き取ると宣言した。そしてふたりをその汚ない恰好のままで外につれだし、旅行用の毛布でくるむと、馬車に乗せて自分の町へつれて行ってしまったのである。グリゴーリイは身も心も捧げきった奴隷のようにこの平手打ちを忍び、乱暴な言葉ひとつ返さなかった。そして老夫人を馬車まで見送った時、地面に届くようなお辞儀をして『みなし児に代ってきっと神様があなたさまにお報いをくださるでしょう』としかつめらしく言ったものである。『それはそうとして、やっぱりお前は阿呆だよ!』将軍夫人は走りだした馬車から彼に向って叫んだ。フョードル・パーヴロヴィッチはいろいろ事情を考え合わせて、これはなかなか結構なことだと思ったので、将軍夫人の手もとで子供たちを養育する件について、その後正式な承諾をあたえた時にも、すべて無条件で一点の異議もさしはさまなかった。一方、例の平手打ちをくらわされた一件は、自分から町じゅうを振れ歩いたものである。

ところがその将軍夫人もその後間もなくこの世を去ることになった。もっとも、ふたりのちびすけにそれぞれ千ルーブリずつの金をあたえる旨の遺言だけはしていってくれた、『これはふたりの教育費にあてること、またこの金額はかならずふたりだけのために、ただし、ふたりが成年に達する時までにちょうど間に合うように使用すること、なんとなればこんな子供にはこれだけの贈り物でも十分すぎるくらいなればなり。もっとも篤志の方はどなたなりともご散財勝手たるべきこと、云々、云々』というしだいである。私は自分でその遺言状に目を通したわけではないが、人の話ではなんでもこんなふうに奇妙な、ひどく風変りな書き方がしてあったそうである。しかし老夫人の主な遺産相続人は、その県の貴族団長をしていたエフィム・ペトローヴィッチ・ポレーノフという誠実な人であった。フョードル・パーヴロヴィッチと手紙をやりとりした結果、この男からその子供の養育料を引きだすことはとてもできない相談だと、すぐに見きわめがついたので（もっとも相手は

けっして明らさまに断わるようなことはなく、こんな場合にはいつもぐずぐずと返事を引きのばし、時にはくどくど泣きごとまで並べたてるのが手だったのである）彼は親身になってふたりのみなし児の面倒を見ることにした。彼は弟のほうのアレクセイをとくに可愛がったので、これはその後ずっと長いことその家庭で大きくなったと言ってもいいくらいである。私はこの事実を最初から心にとめておかれるよう読者にお願いする。もしもこのふたりの青年にとってその養育と教育の点で、その生涯を通じて誰か感謝すべき人間がいたとすれば、それはほかならぬこの当今まれに見る、この上なく高潔で人情に厚いエフィム・ペトローヴィッチその人でなければならない。彼は将軍夫人から残された千ルーブリずつの金を、ちびすけたちのためにそっくりそのまま手をつけずに保管しておいたので、ふたりが成年に達するころにはそれは利に利がつもって、おのおの二千ルーブリにも増えていた。養育費としては自分の金を使ったのであるが、支出がひとりにつき一千ルーブリをはるかに超過していたことはもちろんである。ふたりの青少年時代の詳細な話はまたしばらく見合わせることにして、今はただもっとも重要な点だけをあげておくことにしよう。もっとも、兄のイワンについてはただこれだけのことを言っておくにとどめる。彼は長ずるに従ってなんとなく気むずかしい、自分の中に閉じこもったような少年になった。けっして臆病というわけではないが、しかし早くも十歳ごろからなんとなく、自分たちはなんといっても他人の家庭で、他人のおなさけで育てられているのだ、それに自分たちの父親はなんだか人前で口にするのも恥かしいような人間らしい、といったようなことをちゃんと見抜いていた。この少年は非常に早くから、ほんの小さな子供の時分から（少なくともそう伝えられている）学問に対する一種異常な、輝かしい才能を現わしはじめた。正確なことは知らないが、なんでも彼は十三になるかならぬかで、エフィム・ペトローヴィッチの家庭を離れて、モスクワのある高等学校に入学し、エフィム・ペトローヴィッチの幼な友達の、なんとかいう経験に富んだ、当時非常に有名であったある教育家の寄宿寮に移った。のちにイワンが自分の口から物語ったところによると、これは、天才的な才能をもった児童はその教育もまた天才的な教育者にゆだねらるべきだという思想に心酔していたエフィム・ペトローヴィッチの、いわゆる『善事に対する熱情』からなされたことなのであった。しかし、この青年が高等学校を卒業し、大学へ進んだころには、エフィム・ペトローヴィッチも、また天才的な教育者ももはやこの世の人ではなかった。ところがエフィム・ペトローヴィッチの処置が悪かったために、例の頑迷な将軍夫人から譲られた、今では利に利がつもって約二千ルーブリにも増えているふたりの子供の所有に属する金の払戻しが、この国ではまったくどうにもならない、いろいろな煩雑な形式や事務の渋滞（じゅうたい）のおかげで、すっかり延び延びになってしまったので、この青年はその大学生活の最初の二年間はひどい苦労を味わわなければならなかった。つまり、そのあいだじゅうずっと自活の道を立てながら、同時に勉強もしなければならなかったのである。ここで注意しなければならないのは、その当時彼が父親と文通を試みようなどとは考えてもみなかったということである。――ことによると、それは彼のプライドに、父親に対する軽蔑の念に由来するものかもしれないし、あるいはまた、彼の冷静な常識が、少しでもまじめな援助などとうてい父親から得られるはずはないと、教えてくれたからかもしれない。それはともかくとして、青年は少しも当惑せずになんとか仕事にありついた。はじめは一回二十カペイカの家庭教師をやっていたが、やがていろいろな新聞の編集局を駆（か）けずりまわって、『目撃者』という署名で、市井の出来ごとの十行記事を寄稿する口を見つけた。この短文はいつもじつに面白く、なかなか辛辣（しんらつ）に書けていたので、たちまち広く読まれるようになったという話である。この一事を見ただけでもこの青年が、いつもびいびいして悲惨な境遇にある男女青年学生の大多数に比べて、実際的にもまた知的にもはるかに卓越していることがわかる。まったく両首都（モスクワとペテルブルク）の学生ときては、まずたいてい、朝から晩までいろいろな新聞社や雑誌社にお百度を踏んで、一向に変りばえのしないフランス語の翻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com